

ストラスブール研修で学んだこと・獲得したこと

文学部 2年 S.H.

本研修で学んだこととして、まず第一にストラスブールの歴史が挙げられる。ノートルダム大聖堂を中心とする市街には伝統的な街並みが驚くほどの広範囲に今なお残っており、折に触れて現地のガイドや家庭訪問先の方から建造物や土地の歴史を学ぶことができた。例えば、伝統的な建築様式であるコロンバージュ造の家は地税を最小限にするために上階を拡張して建てられており、その外壁の木枠には建替えの際に以前の家の材木を再利用するのだとホストファミリーに学んだ。また欧州の統合を象徴する欧州議会が置かれる所以でもあるように、ストラスブールはその歴史の中で何度もドイツとフランスの間で所有権が移行しており、市街を散策する中でもそれを実感する機会が多々あった。街の案内表示にはドイツ語が併記されており、伝統的な料理やワインの名もドイツ語由来のものが多くあった。実際にストラスブールからドイツへはトラム一本で訪れることができるほど近く、隣接するドイツの都市のケールでは市民単位での交流も実感することができた。また、日本では馴染みのない西洋宗教の歴史を実際に感じられたことも貴重な経験であった。もちろんノートルダム大聖堂はその筆頭で、精緻な彫刻や荘厳な宗教装飾からは幾世紀も前のストラスブールと二百年以上にわたる建築期間を実感することができ、さらにその歴史はノートルダム博物館での見学でより深く知ることができた。特に十人の女性の寓話を象徴する彫像や死後の虚無を示唆する絵画など、その背景に宗教的世界を包含する作品は興味深く、今までほとんど無知な分野であっただけに印象に残っている。また現地の学生との交流の中でもアルザスの歴史について知ることができ、アルザスの方言やその由来などを聞いたのは新鮮であった。

第二に獲得したこととして、海外での生活経験を得られたことが大きいと感じる。自分は今まで海外経験が無く、長期の海外留学や旅行に対して抵抗を感じていた。今回の研修は二週間の短期で、さらに同学部の研修生が多かったこともあってある程度安心して生活することができた。この二週間の滞在では、日本とは異なる多くのシステムに遭遇した。有料のトイレは初めて目にするものであり、レジの仕組みも日本とは異なっていた。街に二十四時間営業の店はなく、ホテルではエレベーターを使用するにもルームキーが必要だった。また海外の通貨を扱うのも初めてで、相場がなかなか掴めず日本円に換算するのに苦労した。しかし何より実感したことは、大半のことは日本と変わらないということであった。代金を払えば物は買えるし、路線図を見ればトラムにも簡単

に乗れた。どうすれば良いか分からないときに教えてくれた親切な方も多くいたし、忘れ物をしたときは店の方が丁寧に対応してくれた。研修前には、海外と聞くと何もかもが日本とは違うものであり、全く異なる文化を持つ人が全く異なる生活を送っているものだと思っていたが、実際には自分と同じ人間が当たり前の生活をしていることが実感できた。こうしたことは些細なことかもしれないが、今後長期の海外留学や研修・就職後の出張等を考える上で自分の中での障壁が軽減されたことは確かだと感じる。

そして最後に、海外でのコミュニケーションの経験を獲得できた。本研修では現地の人間とのコミュニケーションは最大限フランス語で行なうことを心がけ、そして躊躇わずに自分から話しかけることを目標とした。大学では今まで第二外国語としてフランス語を二年間学習してきており、フランス語でのオーラルコミュニケーションの授業を受講していたこともあって自分のフランス語能力がどこまで通用するのか試したかったことも理由の一つである。宿泊先の部屋の設備に問題が生じたときや外食先で注文する際は、複数人でいても自分が率先してスタッフや店員に話しかけるようにした。日仏会館でのウェルカムパーティー後には幸いなことに現地の学生たちと数度外食する機会を得られ、積極的に参加した。また、現地の大学で日本語を学ぶ学生と交流する際も最大限フランス語でコミュニケーションを行なうようにした。その結果、自分では正しいと思っていた表現が通じなかったり、どうしても適切な表現が思い浮かばず相手に伝わらないことがあった。また以前から自覚していたように自分は特にリスニングが得意ではなく、相手が単純化して話してくれても内容の理解が難しいことが多々あった。また、こちらから質問をしても返答がうまく聞き取れず、詳細を理解できていないことが多かった。自分では多少フランス語の能力に自信を持っていただけに、コミュニケーションが円滑に行えなかった経験は印象に残ったが、しかし同時に自分の中では課題も明確になり、よりリスニングを強化することが目標になった。またフランス語でのコミュニケーションの経験を積んだ反面、英語の重要性も実感した。フランス語での会話に難儀した場合にはどうしても英語に頼らざるを得ず、特に家庭訪問時では自分以外全員が英語堪能だったために大半の会話が英語で行なわれ、日常会話レベルのスピードについて行くことができなかった。英語も試験での点数には自信があっただけに、自分の英語能力が実際のコミュニケーションに活用できるレベルには及ばないことを実感し、まだ実用的な能力の向上が必要であると感じた。

研修ではこうしたことを学び獲得できたが、しかし逆により努力が必要だと感じた事もあった。全般的に感じるのは、研修前での取り組みをもう少し行なうべきだったということである。本研修では欧州議会や大聖堂、博物館など歴史的に極めて価値ある施設を多く訪れたが、現地での説明だけでその内容を理

解することは言語的な問題もあり難しかった。自由時間でも、限られた時間の中でどこを訪れるか事前に決めておけばより多くの場所を見ることができたと感じた。フランス語でのコミュニケーションにおいても、店先等で多少の定型句程度も分からず苦労したため、文法以外にも語彙を増やしておくべきだったと感じた。また本研修では一年生も参加しており、言語の面・行動の面で上級生としての配慮ももう少し必要だったと今になって思う。研修の後半では現地のガイドの方の説明をかみ砕いて説明するなど心がけたが、前半では自分でも自信が無かっただけにそうした手助けをすることができなかつたし、普段の行動も同学年同士で行なうことが多かったのでコミュニケーションもあまり取ることが出来なかつた。

しかしこの二週間の研修における経験は確かにこれから長期留学や海外への渡航を考える上で必ず助けとなるものであり、また学習面だけでなくストラスブールでの観光や滞在自体も大いに楽しむことができ、非常に有意義な研修だったと感じる。